



幼馴染と 学園のアイドル

女子高生たちの恥じらいの放課後

早瀬真人

挿絵／翔丸

立ち読み版

KTC
KILL TIME COMMUNICATION



Contents

目次

第一章	淫乱若奥様の童貞狩り……………	4
第二章	幼馴染みの精液手コキ搾り……………	58
第三章	美少女の隠された、濡れる秘唇……………	104
第四章	豊満若妻のセックス指南……………	138
第五章	美少女の恥肉と包茎いじり……………	181
第六章	幼馴染みの清らかな恥芯……………	223

登場人物

Characters

三上 芳彦

(みかみ よしひこ)

少し気弱で鈍感な、藤美学園に通う二年生の童貞少年。夏美の幼馴染みで、現在は君江が管理するアパートで一人暮らしをしている。

瀬川 夏美

(せがわ なつみ)

芳彦と幼馴染みの、勝ち気で明るい十七歳。芳彦に恋心を抱いているが、負けず嫌いの性格から、素直になれないでいる。バスト八十九センチの豊かな身体を持つ。

稲垣 莉奈

(いながき りな)

芳彦が所属する美術部の一年先輩。清楚で学園のマドンナとも称される十八歳。サラサラの黒髪が似合うお嬢様。一見優等生タイプの物静かな少女だが……。

村口 君江

(むらぐち きみえ)

芳彦が住むアパートの大家であり、藤美学園の非常勤保健師でもある二十七歳。夏美の叔母。グラマラスボディを持つ人妻。

芳彦はなんとかドアの取っ手を掴むと、扉を開け、恐るおそるタイルの上へと足を伸ばした。

「ふう。なんとか入れそうだ。そのうち電気もつくだろう」

そう考えた芳彦だったが、すぐさまある異変を感じ取った。前方から、なぜかもうもうとした熱気が漂い、シャカシャカと小さな奇妙な音が聞こえてくる。

（おかしいな。普通は風呂つて、湯の温度を下げないよう、蓋を乗せてるはずなんだけど。それに何だ、この変な音は？）

小首を傾げながら桶を探そうと身体を屈めた瞬間、電灯がパッとつき、芳彦は心臓が止まりそうなほどの衝撃を受けた。

なんと湯船の中に、夏美が入っていたのである。

4

夏美は防水用のCDラジカセを側に置き、ヘッドフォンを耳に当てていた。

シャカシャカと聞こえてきた音は、音楽の曲だったのだ。

おそらく芳彦が入室してきたときの音は、まったく聞こえていなかったのだろう。

夏美も事態が呑み込めないのか、目をまん丸にしている。二人の視線が絡み合っていた時間は、ほんの数秒だろうか。

夏美は唇をわなわな震わせると、衣を引き裂くような悲鳴をあげた。

「きやあああああつ！」

「うわっ」

「芳彦！ いったいどういふつもり!!」

夏美は防水用のヘッドフォンを耳から外すと、膝を折り曲げ、両手で胸を隠す。

「ご、ごめん！」

芳彦は慌ててその場から出ていこうとするも、足を滑らせ、そのまま頭から湯船の中へと真っ逆さまに落ちてしまった。

おでこをバスタブの底にしこたま打ちつけた瞬間、瞼の裏で白い火花が飛び散る。

「きやああ！」

夏美はすぐさま立ち上がり、フックにかけておいたバスタオルを身体に巻きつけると、芳彦の身体を起こした。

「ゲホッ！ ゲホッ！」

水を呑んで咳き込む芳彦を、夏美は心配そうに見つめている。

「芳彦、大丈夫？」

「な……なんとか。はあ、もう死ぬかと思った」

「や、おでこから血が出てるよ」

「えっ」

指で触つてみると、激痛が走る。指先には血が着いており、どうやら額を切つてしまったようだ。

夏美はバスタブの縁に置いていた自分のタオルを手にとると、四つに畳み、芳彦のおでこにそつと押し当てた。

「ちよつと腫れるかもしれないけど、傷はそんなに大きくないわ。ああ、びっくりした。私がお風呂に入ってること気づかなかったの？」

「だって、雷が落ちて、停電になってたんだよ。夏美、真つ暗闇の中で、よく一人で入ってたよね」

「え？ 停電？ 私、音楽聞きながらうとうとしちゃつて、雷が落ちたことも停電になつたことも気づかなかつたわ」

「それでバスタブのほうから、人の気配が伝わってこなかつたんだ。シャカシャカつていう音だけは聞こえてきたんだけど」

「バカね。その音で気づきなさいよ。ほんとに鈍いんだから」
そう言いながら、夏美は芳彦の額の傷を確認する。

「血はだいぶ止まってきたみたい。痛い？」

「うん、まだちよつとズキズキする」

芳彦がタオルを自ら押さえると、夏美はホッとひと息つき、バスタブの側面に背中を預けた。

「いつの間にか、こんなに降ってたのね」

窓の外からは、相変わらず強い雨の音が聞こえてくる。しばしの沈黙が流れると、芳彦は急に羞恥心を覚えはじめた。

年頃の男女が、まるで新婚夫婦のように向かい合わせて入浴しているのである。これはどう考えても、不自然な状況だ。

いたたまれなくなった芳彦は、俯き加減でぼつりと告げた。

「そ、そんなことより……夏美、僕、もう出ていくよ」

「だって、頭からまだ血が出てるよ。脳しんとうでも起こしてたら大変だし、このまま入ってなよ」

「じよ、冗談でしょ。こんな場面を百合子さんに見られたら、その場で追い出されち

やうよお」

「大丈夫よ。この激しい雨じゃ、君江叔母さんの所から帰ってこれないわ。恥ずかしいんだったら、タオルで身体を隠せばいいでしょ？」

そう言いながら、夏美はバスタブの外へ手を伸ばし、タイルの上に落ちていた芳彦のタオルを取って手渡す。

芳彦はタオルを広げ、前面を隠すように湯船に浸らせた。

狭い浴槽の中、向かい合わせの形に座った二人の肌と肌が触れる。

（この歳になって一緒に風呂に入ってるなんて、どうにも変な気分だな）

夏美と入浴するのは、小学校低学年の時以来だ。

「芳彦、どう？ 湯加減は？」

「うん、ちよつとぬるいけど、ちょうどいいよ」

そう答えながらも、バスタオル越しの胸の膨らみと谷間に目がいってしまふ。

夏美はやや伏し目がちのまま、片手で掬ったお湯を肩からかけていた。

きめの細かい白い肌がしつとりと濡れるも、すぐに水を弾いていくその様は、さすがに十代の若い女の子のことだけはある。

桜色に上氣した夏美の顔を、芳彦は上目遣いでじっと見つめた。

身体は成長しても、ベビーフェイスの容貌はずっと変わらない。

（悔しいけど、やつぱり可愛いよな。それに今は結構優しいし）

「芳彦、どう？ 血は止まった？」

「あ、うん」

タオルを外してみると、新しい血はほとんど付着しておらず、夏美がホッとした表情を見せる。

「よかった。止まったみたいね」

「それじゃ、僕はこれで……」

芳彦が立ち上がりとしたその刹那、それまで温厚な表情をしていた夏美は突然真顔へととなった。

「ちよっと待って」

「え？」

「芳彦に……その……聞いておきたいことがあるの」

「な、何？」

よほど聞きづらいことなのだろうか。夏美はいったん目を伏せたあと、決心したかのように顔を上げた。

「あんた、三年の稲垣^{いながき}さんのことが好きなんですって？ 彼女とつき合いたくて、美術部を選んだって話を聞いたんだけど」

その言葉に、芳彦は泡を食った。

稲垣^{りな}莉奈は清楚で上品なお嬢様風のルックスで、男子生徒たちから一番人気の学園のマドンナであり、芳彦も羨望の眼差しを送る美少女だったのである。

莉奈が所属する美術部に入部したのも、彼女に少しでも近づきたいと考えてのことだったが、夏美はなぜそんなことまで知っているのか。

「だ、誰から聞いたの？」

仲のいいクラスメートたちの顔が、脳裏に浮かんでは消えていく。

「誰でもいいでしょ。そんなことより、あんたが稲垣さんと釣り合うと思ってるの？ 女心さえわからないような、鈍感を絵に描いたような男なのに」

「うるさいなあ。夏美には関係ないでしょ。ほつといてよ」

一番気にしていたところを突かれ、芳彦はいっぺんに気分を悪くした。

夏美に言われなくても、自分が莉奈のボーイフレンドにふさわしくないことは十分承知している。

それでも男なら、絶世の美少女とつき合いたいと思うのは至極当然のことである。

芳彦がプイと横を向くと、夏美は鼻白んだ笑みを浮かべた。

「もういいよ。どうせ相手にされっこないんだし。さあ、身体洗ってあげるわ」

「え？」

「聞こえなかった？ 身体を洗ってあげるって言ったの」

「い、いいよ」

「なんで？ 今さら照れることないでしょ。昔はお医者さんごっこだって、よくしたじゃない」

「身体を洗うこととは……関係ないと思う」

「けが人をいたわってあげるのは、当然のことよ。早く！」

「あ、ちよっ……!!」

一度言い出したら聞かない性格の夏美である。

腕を掴まれ、強引に風呂からあげられた芳彦は、慌ててタオルを腰に巻いた。

「まずは背中からね。後ろを向いて」

（やれやれ）

思わず溜め息が出てしまう。言われるがまま身体を反転させると、夏美はタオルにボディシャンプーを含ませ、棒立ちになった芳彦の背中を泡立たせていった。

（お医者さんごっこか。そういえば、いつも夏美が先生役だったな）

ペニスを指で摘み、盛んに不思議そうな顔をしていた夏美が思い出される。

（夏美には、いつもおチンチンをいじくられてたんだっけ。もし今、そんなことをされたら……あつ、いけない）

その光景を妄想しただけで、ペニスがグングンと体積を増していき、勃起はタオルの前部分を派手に盛り上がらせていった。

（またあ。やばい、どうしよう。ええい、鎮まれっ！）

そう思っても、一度火のついた性欲は鎮火しない。芳彦は両手で股間を押さえ込んだものの、次の瞬間、「ひゃあ」という大きな悲鳴をあげた。

突然夏美が、腰に巻いていたタオルを取り外してしまったのである。

「な、何を？」

「あら？　だつて、お尻だつてちゃんと洗わなきゃ汚いでしょ」

そう言いながら、夏美はタオルで芳彦の臀部を擦り上げていった。

柔らかい布地が尻朶を往復するたびに、その感触が快感電流へと変わり、前面のほうへと響いてくる。

（だめだ、だめだ。全然収まらないよ！）

ギョッと臉を閉じ、唇まで噛み締めたものの、まったく効果がなく、ついに夏美の口から無情とも思える言葉が放たれた。

「さあ、前を向いて」

「えっ？ いい、いいよ！ 前は自分で洗えるから！」

「何を恥ずかしがってんのよ。ちゃんと手で隠してるんでしょ？」

冗談ではない。今や隆々と屹立した逸物は手のひらでは収まりきらず、上方から龟头と肉胴の一部をはみ出させているのである。

（逃げよう。今すぐ逃げなきゃっ！）

そう決心した刹那、芳彦は自身の腰に夏美の両手が添えられた感触を覚えた。どうやら、強引に振り向かせようとしているようだ。

「ちよっと待って！」

思わず両足を踏ん張った芳彦だったが、タイルの上に落ちていた泡が足裏に付着していたせいか、身体は自分の意思とは無関係に、その場でくるりと回転した。

（あっ）

心の中で驚愕の悲鳴をあげるも、剛直と化したペニスの先端は、夏美の顔を突き刺すかのように曝け出されている。

「うわっ！」

芳彦は顔を真っ赤にさせ、慌ててその場にしゃがみ込んだ。

夏美は目を大きく見開き、愕然とした表情を浮かべている。そしてやや眉根を寄せながら、怒ったような口調で言い放った。

「ちゃんと立って」

「もう。勘弁してよお」

「聞こえなかった？　ちゃんと立ってって言ったの。そのままじゃ、いつまで経っても洗えないでしょ」

夏美は尻尾を吊り上げ、キッと見据えてくる。

この表情を見せたときの夏美は凄まじい怒りを覚えているときで、決まってこのあとは平手が飛ぶか、足蹴りを見舞わせることが常となっていたのだ。

（くそっ……もうどうにでもなれ）

芳彦は覚悟を決めると、ゆっくりと立ち上がった。

勃起はいまだ両手からはみ出している。あまりの羞恥から、火がついたように全身がカッと熱くなる。

夏美は急に無口になり、再びタオルにシャンプー液をまぶすと、芳彦の足や胸、腕

を泡立たせていった。

夏美の顔からは、先ほど見せた険しさは消えている。

笑っているわけでもなく、さりとて怒っているわけでもなく、唇を真一文字に引き結んでおり、その表情からは彼女の真意までは計れない。

（いったい、どういうつもりなんだろう。男とつき合ったことがあるんなら、男の生理ぐらい多少はわかっていいるはずだよな。女の子と一緒に風呂に入ってるんだもん。勃起したって、不可抗力だよ）

首筋を洗ってもらい、芳彦はようやく苦痛の時間から介抱されたように、ホッと安堵の溜め息を放った。

股間の肉槍はやや萎靡しかけ、手のひらの中にすっぽりと収まっている。

一部分は見られてしまったが、今さら嘆いてみても仕方がない。

（はあ。あとはシャワーのお湯を浴びて終わりだ）

そう考えた芳彦だったが、夏美が次の言葉を放った瞬間、再び口をあんぐりと開けた。

「手を外して」

「へっ?」

「手を外すの」

「こ、ここはいいよ。自分で洗うから」

必死の懇願を試みるも、夏美はまたもやキッと睨みつけてくる。この顔つきをされたあとは、怖くて何も言い返せなくなるのも、またいつものことだった。

（きつと僕の包茎ペニスを見て、からかおうとしてるんだ）

芳彦は首をがっくり落とすと、股間から両手を恐るおそる外していった。

（ああ。夏美に見られている。恥ずかしいよお）

夏美は瞳孔を開かせ、観察するようにペニスを凝視している。

てつきり嘲笑を予想していたものの、夏美は少しも口を開こうとはしなかった。

これまで見せたことのないような真面目な顔つきをしており、いったい何を考えているのか、さっぱりわからない。

（い、いつまで見てるんだ？ もう限界だよお）

やがて夏美は我に返ったように、手のひらにシャンプー液を泡立たせていった。

（え？ まさか……嘘）

思わず全身を強ばらせた芳彦が、再び股間を手で隠そうとしたその刹那、一瞬早く夏美の指がペニスへとまとわりつく。

その瞬間、凄まじい快感が下腹部を貫き、芳彦は思わず天井を仰いだ。

夏美はまるで腫れ物でも触るかのように、ペニスの包皮を剥き、萎えた肉塊をゆつくりと揉み込んでいく。

（な、夏美が僕のおチンチンを？）

芳彦は信じられないという顔つきで眼下の光景を見下ろしていたが、ふつくらとした指腹の感触に、すぐさま恍惚の表情を浮かべた。

右手で肉幹、左手で睪丸を転がされると、当然のことながら、海綿体に血液が流れ込み、ペニスがグングンと膨張していく。

夏美は指の動きを止め、目を再び見開いたあと、花びらのような唇を微かに開きながら溜め息混じりの言葉を放った。

「すごい……コチコチ」

泡だらけの股間からニョキッと突き出たペニスは、今や天を向き、完全な剛直と化している。

夏美は頬をややピンク色に染めると、再び肉胴に指を巻きつかせ、上下にやんわりとスライドさせていった。

（ああ、嘘。気持ちいい。気持ちよすぎるよお）



粘着質のシャンプー液が潤滑油の代わりになっているのか、ぷくつとした指腹が肉胴の上を軽やかに滑り、凄まじい快感が間断なくペニスに襲いかかってくる。君江の唾液ローションに負けず劣らずの心地よさだ。

芳彦は眉を八の字に下げ、女の子のように腰をくねらせた。

「あああ」

自然と口をついて出た喘ぎ声に、夏美が上目遣いでチラリと見上げてくる。

「き……気持ちいいの？」

気恥ずかしさから、芳彦がただ小さく頷くと、夏美は人差し指と親指で作った手筒で、本格的に怒張をしごき上げていった。

「あつ、夏美！ そんなことしたら!!」

あまりの快楽に唇の端が自然と歪み、次なる言葉が出てこない。

夏美は肉感的な肢体を弾ませるように、両指で節ばった肉胴の表面を熾烈に擦り上げていった。

バスタオル越しのふくやかな双乳が、ユサユサと上下に揺れる。その頂点に、ぼちりと浮き上がっている小さな尖りは乳首だろうか。

それらのエロチックな光景が交感神経をより刺激していたが、芳彦の性感をさらに

煽らせたのは夏美の表情だった。

瞬きもせずにやや眉尻を吊り上げ、真剣な眼差しを送るその顔の、なんと凜としたことか。

夏美は射精を早く促すかのように、今や腕全体を使い、大きなストロークで肉幹をしごいていた。

目には見えなかったが、大量のカウパーが溢れ出ているのだろう。それは泡と同化し、まるで卵白を泡立てたかのようなメレンゲ状態と化している。

今の芳彦は相手が幼馴染みだということも忘れ、本気で感じていた。射精感があつという間に頂点へと導かれ、腰に小さな痙攣が走り出す。

もはや立っていることさえままならず、ふらつきながら夏美の両肩に手を添えてしまふ。

「あ……あ。だめっ」

芳彦が喘ぎ声を洩らすと、それを合図としたかのように、夏美はペニスをしごき倒すかのようにさらに指の動きを速めた。

「あっ！ あああああ」

亀頭がブワツと大きく膨らむ。強靱な芯を蓄えた肉胴がびんびんとなる。

眼下にふと視線を送ると、夏美は芳彦の顔を仰ぎ、いまだ真剣な表情でじつと見つめていた。

つぶらな瞳、艶のあるバラ色の唇。愛くるしい顔立ちは、芳彦の性感を一気にレツドゾーンへと飛び込ませる。

「あ、あ……だめだよ。イクつ、イッちゃう」

やや前屈みになりながら放出の瞬間を訴えると、夏美はペニスを胸元にグッと引き寄せ、さらに苛烈なスライドを試みた。

柔らかい指が、雁首を強烈に擦り上げる。今度は左手のひらが、陰囊を転がすように撫で上げる。

「あ……くっ!」

芳彦は腰を前後にガクガクわななかせると、深奥部に溜まっていた欲望の証を一気に解き放った。

「きゃっ!」

鈴口から放たれた樹液が一直線に跳ね上がり、夏美の顎から頬へと打ちつける。

二陣目はさらに夏美の頭を飛び越えるかのように舞い上がり、三陣目、四陣目は首のあたりで流線型の不可思議な模様を描くように翻った。

頭のでっぺんから爪先まで痺れるような、著しい快美が突き抜けていく。

夏美は相好を崩さないまま、いまだペニスを右手でしごきながら、芳彦の顔に視線を留めていた。

すべすべした頬や唇の端に、濃厚な精液が付着し、ゆっくりと滴り落ちてくる。

芳彦は間断のない喘ぎ声を発しながら、夏美の顔を虚ろな目で見下ろすばかりだった。

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>

キルタイムコミュニケーション オフィシャルサイト

<http://ktcom.jp/>

- 雑誌、コミック、小説の**通信販売**もやってるよ! **19日発売!**
- 二次元ドリームマガジン・コミックアンリアル**のバックナンバー**も買えるよ!
- ジャンル別**で作品も選べて超便利!
- 二次元編集部**の愉快なBlog**も更新中!



<http://www.comic-alkyrie.com/>



<http://www.cran-berry.com/>



<http://www.mille-feuille.jp/>



<http://www.2d-dream.jp/>



KTCの戦うヒロインオンリー漫画雑誌! 18禁ではないからこそ表現できるドキドキがある!!

二次元ドリームノベルズがアニメにも進出! 新生ブランド・克蘭ベリーをよろしく!!

二次元ドリームノベルズから生まれた美少女ゲーム! 「ミルフィーユ」ブランドにて続々登場!

二次元ドリームノベルズが携帯電話で読める! 携帯サイト限定の書き下ろし小説もあるよ!